浦ノ田遺跡 II

— 九州国立博物館建設予定地内の埋蔵文化財発掘調査 2 —

福岡県文化財調査報告書

第 155 集

2000

福岡県教育委員会

浦ノ田遺跡 II

— 九州国立博物館建設予定地内の埋蔵文化財発掘調査2 —

福岡県文化財調査報告書

第 155 集

序

本書は、福岡県教育委員会が福岡県総務部国立博物館対策室から執行委任を受けて実施した国立博物館建設予定地内の事前の発掘調査の記録です。

本書に掲載した浦ノ田遺跡は、菅原道真公の御墓所として知られる太宰府天満宮から近い位置にあります。太宰府天満宮は学問の神様として常に多くの参拝客で賑わい、また境内をとりかこむ木々や小鳥のさえずりは人々に心の潤いを与えています。こうした豊かな文化と自然環境に恵まれ、新たに建設される国立博物館が人々の憩いの場として親しまれることを願ってやみません。

今回の発掘調査では縄文時代早期の集落跡や中世の集落跡などが発見されました。発掘調査の記録としては決して十分なものではありませんが、本書を通して地域の文化財愛護思想の普及や学術研究の一助となれば幸いです。

発掘調査および整理作業、報告書の作成にあたって、ご協力いただいた多くの方々に対し、深甚の謝意を表します。

平成12年3月31日

福岡県教育委員会
教育長　光安　常喜

例言

1. 本書は、平成11年に福岡県教育委員会が福岡県総務部国立博物館対策室から執行委任を受けて実施した、浦ノ田遺跡第2次発掘調査の報告である。
2. 遺構の実測は吉田東明、林潤也が行った。
3. 遺構写真は吉田が、遺物写真は北岡伸一が撮影した。なお空中写真は空中写真企画に委託した。
4. 出土遺物は九州歴史資料館において整理・復元作業を行い、実測図は吉田が作成した。
5. 挿図の浄書は吉田が実施した。
6. 出土遺物・図面・写真等については、すべて九州歴史資料館および福岡県文化財保護課太宰府事務所に保管している。
7. 本書の執筆・編集は吉田が行った。

本文目次

Ⅰ　調査の経過 …… 1
Ⅱ　位置と環境 …… 4
Ⅲ　発掘調査の記録 …… 7
　1　基本層序 …… 7
　2　縄文時代の遺構と遺物 …… 8
　3　歴史時代の遺構と遺物 …… 16
Ⅳ　おわりに …… 25

図版目次

図版1　1. 浦ノ田遺跡周辺（航空写真　北から）
　　2. 浦ノ田遺跡第2次調査区全景（気球写真　南から）
図版2　1. 調査区北東壁土層（西から）
　　2. 調査区南西壁土層（東から）
　　3. グリッド調査風景（北から）
図版3.　1. 1号集石（南から）
　　2. 1号集石炉（南から）
　　3. 1号落とし穴（北から）
図版4　1. 1号掘立柱建物跡・2号溝（北から）
　　2. 1号土坑焼土層半截状態（北から）
　　3. 1号土坑完掘状態（北から）
図版5　1. 2号土坑（北から）
　　2. 3号土坑半截状態（西から）
　　3. 3号土坑完掘状態（西から）
図版6　1. 4号土坑（西から）
　　2. 5号土坑（西から）
　　3. 6号土坑（西から）
図版7　1. 縄文土器①
　　2. 縄文土器②
　　3. 縄文土器③
　　4. 縄文土器④
図版8　1. 縄文土器⑤
　　2. 石器①
　　3. 石器②
　　4. 石器③
図版9　1. 土坑・溝出土遺物
　　2. ピット出土遺物
　　3. 包含層出土遺物①
　　4. 包含層出土遺物②
　　5. 古銭

挿図目次

第1図　周辺遺跡分布図（1/25,000）……3
第2図　浦ノ田遺跡周辺地形図（1/1,500）……5
第3図　浦ノ田遺跡第2次調査区遺構配置図（1/300）……6
第4図　調査区東壁・西壁土層図（1/100）……7
第5図　縄文時代遺物分布図①（1/100）……9
第6図　縄文時代遺物分布図②（1/100）……10
第7図　集石・集石炉・落とし穴実測図（1/30）……11
第8図　縄文土器実測図①（1/3）……13
第9図　縄文土器実測図②（1/3）……14
第10図　石器実測図（2/3）……15
第11図　1・2号掘立柱建物跡実測図（1/60）……17
第12図　1～6号土坑実測図（1/30）……18
第13図　土坑出土遺物実測図（1/3）……19
第14図　2号溝土層図（1/20）……20
第15図　溝出土遺物実測図（1/3）……21
第16図　ピット出土遺物実測図（1/3）……22
第17図　包含層その他出土遺物実測図（1～16：1/3、17：1/1）……23
第18図　浦ノ田遺跡主要遺構配置図（1/500）……25

Ⅰ　調査の経過

九州国立博物館（仮称）は、「日本文化の形成をアジア史的観点から捉える」という視点のもと、現在福岡県が官民一体となって設置を進めている総合博物館である。

平成5年12月、福岡県総務部国立博物館対策室と県文化課との間で、国立博物館建設予定地内の文化財の有無について協議が行われた。国立博物館建設予定地内には周知の遺跡として浦ノ田A遺跡と浦ノ田B遺跡とが登録されており、この二遺跡の範囲の確認と、さらに未周知の遺跡の有無を確認するため、平成7年1月30日から2月8日の間で試掘調査を実施した。その結果、新たな遺跡の発見は無かったが、上記二遺跡を再確認することができ、この成果をもとに、平成7年8月28日から11月15日にかけて、浦ノ田A遺跡、浦ノ田B遺跡の発掘調査が実施された（第1次調査）。また、未買収地等についての試掘・発掘調査については次年度以降に実施することとなった。

平成10年9月2日、国立博物館対策室から新規購入箇所等未調査区域についての発掘調査依頼があり、これに対して平成10年度中に発掘調査を終了することで協議が成立した。

浦ノ田B遺跡第1次調査区に隣接する区域は遺構の存在が確実に予想されたために、まずこの区域の本調査を実施し、ある程度進行した段階で他区域の試掘調査を実施することとした。なお、既存の遺跡台帳に従えばこの調査区については「浦ノ田B遺跡第2次調査区」と呼称すべきだが、便宜上浦ノ田A遺跡・B遺跡を同一遺跡と扱い、今回の調査区は「浦ノ田遺跡第2次調査区」と呼称することとした。

試掘トレンチ（T-2）

試掘トレンチ（T-6）

遺跡上空から九州歴史資料館を望む

発掘調査は平成11年1月12日に開始した。表土掘削には0.7のバックフォーを使用したが、予想以上に掘削土量が多く、廃土除去作業に多大な時間を費やした。1月18日には作業員を召集し、第2次調査区北東側から遺構検出作業に取りかかった。北東側に関しては傾斜が急であり、遺構は予想以上に稀薄であった。1月28日からは調査区南西側の遺構検出作業を実施した。掘立柱建物跡・溝・土坑を主とする歴史時代の遺構の検出をみたが、同時に縄文時代早期の遺物の出土を確認し、下層遺構の発掘調査が必要な事も判明した。2月12日には南西側の遺構掘削もほぼ終了し、翌日からは図面作成と併行して他の遺跡未確認区域の試掘調査を実施した。試掘調査には主として人力掘削を行い、重機が進入可能な場所についてはバックフォーを使用した（T－1～T－13）。遺物は若干出土したが、遺構は確認できなかったために調査対象区からは除外した。

2月25日にはバルーンによる空中写真撮影を実施し、3月1日からは縄文時代早期の遺物が出土する黄褐色土の分布する範囲を中心にグリッド調査を開始した。当初は遺構の存在は期待していなかったが、予想に反して集石や集石炉、落とし穴を発見する事ができた。

3月17日からは調査が終了した箇所から順次埋め戻しを行った。3月19日には埋め戻し作業を完了、器財を撤収し、全ての作業を終了した。

発掘調査、整理・報告書作成にいたる関係者は以下の通りである。

	平成10年度（調査）	平成11年度（整理・報告書作成）
福岡県教育委員会		
総括		
教育長	光安　常喜	光安　常喜
総務部長	富永　　勲	岩本　　誠
文化財保護課長	石松　好雄	柳田　康雄
参事	柳田　康雄	井上　裕弘
参事兼課長技術補佐	井上　裕弘	橋口　達也
課長補佐兼管理係長	角　　伸幸	角　　伸幸
調査第一係長	橋口　達也	児玉　真一
参事補佐	中間　研志	中間　研志
庶務		
主任主事	田中　利幸	佐藤　雅二
調査・報告書作成		
主任技師	吉村　靖徳（試掘調査）	吉田　東明
	森井　啓次（試掘調査）	
	吉田　東明（本調査）	
調査補助員	林　　潤也	

発掘調査、整理・報告書作成にあたっては、太宰府市をはじめとする住民の方々や太宰府市教育委員会、国立博物館対策室の方々に多大なご支援、ご協力を頂いた。記して謝意を表します。

1. 浦ノ田遺跡
2. 大野城跡
3. 岩屋城跡
4. 水瓶山経塚
5. 原山無量寺・原経塚
6. 宝満山経塚
7. 宝満山旧石器遺跡
8. 榎本中堂跡
9. カマド山寺(大山寺・有智山寺)
10. 浦ノ城
11. 原遺跡
12. 安楽寺(太宰府天満宮)
13. 通歌屋遺跡
14. 馬場城跡
15. 太宰府天満宮境内地内墳墓群
16. 原遺跡
17. 高雄山城跡
18. 菖蒲浦古墳群
19. 太宰府条坊跡(指定)
20. 竹塚遺跡
21. 結ヶ浦遺跡
22. 今王遺跡
23. 吉ヶ浦遺跡
24. 御笠遺跡群

第1図　周辺遺跡分布図（1/25,000）

Ⅱ　位置と環境

浦ノ田（URANOTA）遺跡は太宰府市大字石坂字浦ノ田に所在する。太宰府市は福岡県の中心都市である福岡市の南約16kmに位置し、北東部は糟屋郡宇美町、南東部は筑紫野市、北西部は大野城市に接する。東に宝満山、北に四王寺山があり平野部は南から北西に開ける。市を縦貫する御笠川は宝満山に源を発し、途中鷺田川と合流して博多湾へと注ぐ。

少し前までは水田耕作を中心とした農業と、太宰府天満宮門前町から発達した商業が中心の町だったが、高度経済成長後は福岡市を中心とした経済圏の中で都市化、近代化し、産業形態も第一次産業から第三次産業へと変化しつつある。また人口も大幅に増加し、昭和57年には市制を施行して太宰府市が誕生するに至る。

古代においては、言うまでもなく大宰府政庁の所在地として九州地方の政治・経済・外交の要となり、「遠の朝廷」とまでうたわれ、わが国の文化活動の一大拠点として重要な役割を占めていた。現在でも残る数多くの寺社、史跡、祭りや民芸に往時の姿がしのばれる。

太宰府市内では古墳時代以降の遺跡が非常に多く、大宰府条坊跡をはじめ多くの発掘調査が行われており貴重な成果があげられているが、弥生時代以前の遺跡はそれほど多くない。今回の発掘調査で対象時期となった縄文時代早期の遺跡を見てみると、市内では石穴遺跡1次調査D区や条坊102次、釜蓋原遺跡、辻遺跡などで縄文時代早期の遺物が出土し、他にも大野城市と市域を接する浦ノ田・成屋形・雉ヶ尾遺跡周辺で遺物が採集されている。市外では筑紫野市池田遺跡や原遺跡で該期の遺物が出土している。特に浦ノ田遺跡から1km程東側に位置する原遺跡では早期の遺物がまとまって出土し、石組炉や落し穴も検出されている。

浦ノ田遺跡は大宰府天満宮から500m程しか離れておらず、古代・中世期の遺構形成と、現天満宮の地下に眠る安楽寺とは強い関連があったように思える。太宰府天満宮の調査は第4次調査までが太宰府市教育委員会によって実施されており、出土遺物や検出遺構から特に12世紀前半～中頃に安楽寺境内の整地・拡張事業などの整備が進められた事が指摘されている。

参考文献

『太宰府市史』　考古資料編　太宰府市　1992

『太宰府天満宮』　太宰府天満宮境内地発掘調査報告書第1集　太宰府天満宮　1988

『太宰府天満宮Ⅱ』　太宰府市の文化財第15集　太宰府市教育委員会　1990

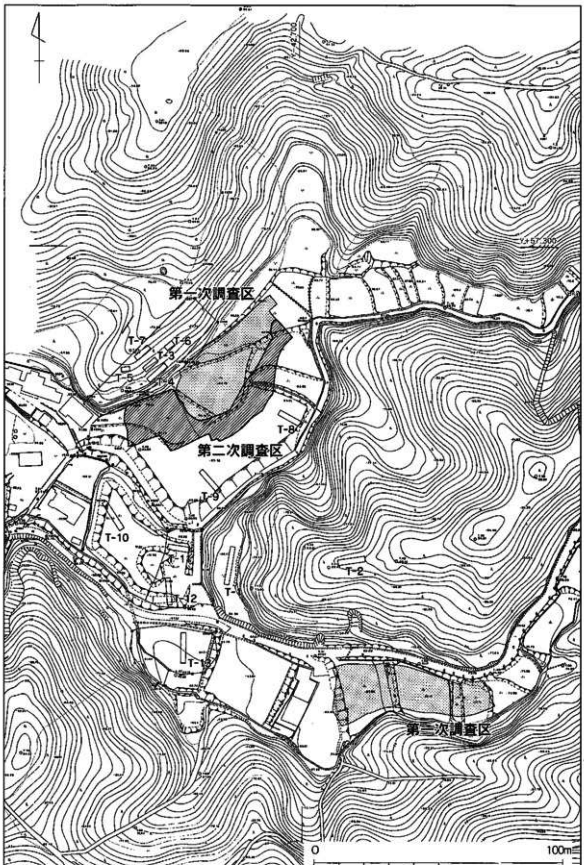
『太宰府天満宮参道』　太宰府市の文化財第19集　太宰府市教育委員会　1993

『太宰府天満宮Ⅲ』　太宰府市の文化財第26集　太宰府市教育委員会　1995

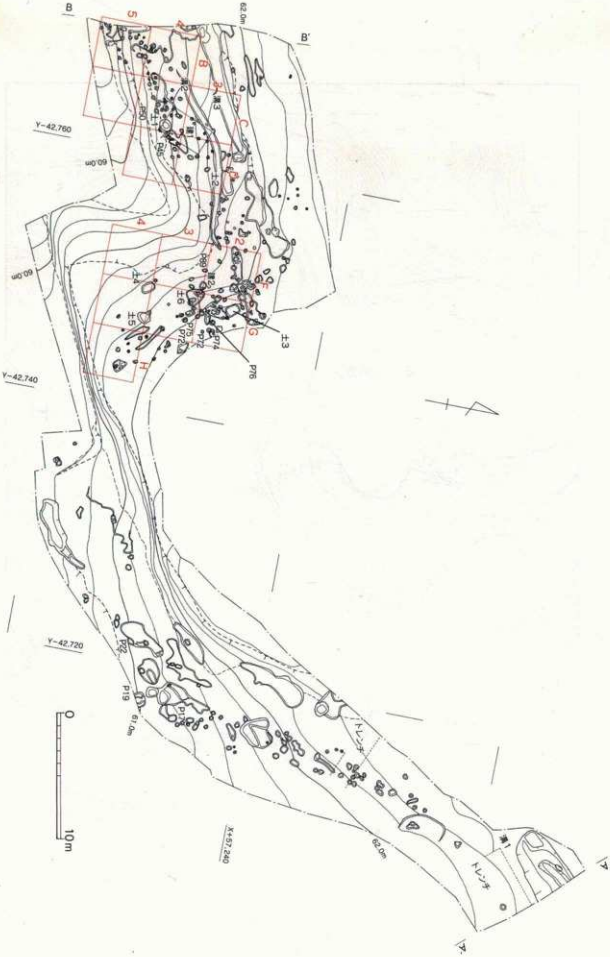
『辻遺跡』　太宰府市の文化財第33集　太宰府市教育委員会　1997

『原遺跡』　福岡県文化財調査報告書第119集　福岡県教育委員会　1994

『浦ノ田A・B遺跡』　福岡県文化財調査報告書第126集　福岡県教育委員会　1996



第2図　浦ノ田遺跡周辺地形図（1/1,500）



第3図　浦ノ田遺跡第2次調査区遺構配置図（1/300）

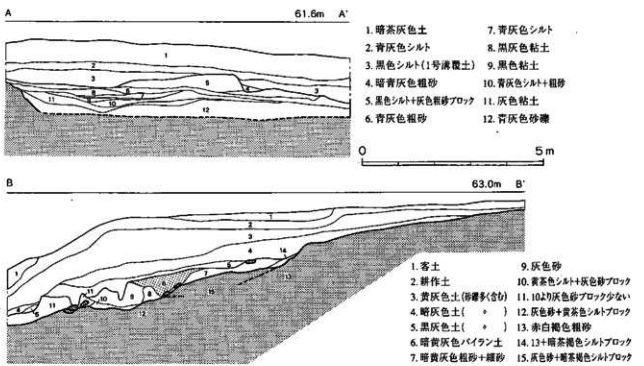
Ⅲ　発掘調査の記録

1　基本層序（図版2、第4図）

浦ノ田遺跡第2次調査区は北東-南西に細長く、谷部に位置する北東側と段丘平坦面に位置する南西側とでは堆積状況が大きく異なっている。したがって、ここでは調査区北東側と調査区南西側について、それぞれの堆積状況の説明を行う。

調査区北東側は山裾に端を発する小規模流路の開析作用によって形成された谷部に相当し、土層は不安定な複次堆積層である。調査以前は水田として利用されていたため、最上層には水田耕作土がみられたが、土層図作成時は耕作土を除去していたために図示していない。この耕作土の下には比較的安定した暗茶灰色土が厚く堆積する。この層中には歴史時代以降の遺物が若干包含される。第2層は青灰色シルト層で、全く締まりがない。遺物はわずかに含まれる程度である。第3層は黒色シルト層で1号溝の覆土である。やはり遺物は非常に少ない。第5層は黒色シルトと灰色粗砂からなる非常に堅く締まった層であり、この層以下には遺物が含まれない。したがってこの層の上面を遺構面に設定した。同時に調査区東側においては歴史時代以前に遡る遺構・遺物は無いとの判断を得た。

調査区南西側は山裾に小さく開けた段丘平坦面上に位置する。調査以前は居住地、畑地として利用されており、第1層は造成時の盛土、第2層は耕作土が堆積する。第3・第4層は東壁の第1層にほぼ対応し、やはり歴史時代以降の遺物を包含している。従って第4層の下面を遺構検出面に設定した。第5層は砂礫を多く含んだ黒灰色土で遺構覆土である。第6層は暗黄灰色パイラン土、第7層は第6層とほぼ同質で、土層図を作成した場所では良好な堆積状況ではないが、この調査区南西側の平坦面上では広く堆積する層である。この層には押型文土器を



第4図　調査区東壁・西壁土層図（1/100）

中心とする土器が含まれるため縄文時代早期の包含層と判断し、第6層・第7層が分布する範囲を中心にグリッドを設定して調査を行った。第9層は灰色砂層で、上層のみわずかに遺物を包含する。従って調査時には第9層上層までの掘削を行っている。10層以下は遺物を全く含まない無遺物層である。13層は非常によく締まった赤白褐色粗砂層で基盤層となる。なお、第1次調査で旧石器時代の遺物が出土しており今回の調査でも当該遺物の発見とその層位の把握に努めたが、遺物を発見することはできなかった。

2　縄文時代の遺構と遺物

調査区の設定

歴史時代の遺構調査時に、遺構面から時折出土する押型文土器やサヌカイト剥片の分布状況から、縄文時代早期の遺物包含層が調査区南西側に堆積し、特に黄褐色土・暗黄褐色土に遺物が集中することを確認した。従って第一遺構面の調査終了後、黄褐色土・暗黄褐色土が堆積する箇所を中心に4m×4mを1グリッドとする調査区を設定した。座標に沿って北から順に1、2、3、西から順にA、B、C、と記号を付し、それぞれのグリッドをA-1、B-2というように呼称した。調査区の中で遺物が出土したグリッドは、B-4・5、C-3・4・5、D-3・4、F-2・3・4、G-2・3・4、H-4の計14グリッドである。出土遺物はそれぞれNO.を付してレベルをとり、出土層位を確認しながら取り上げを行った。

グリッド調査（図版2、第5・6図）

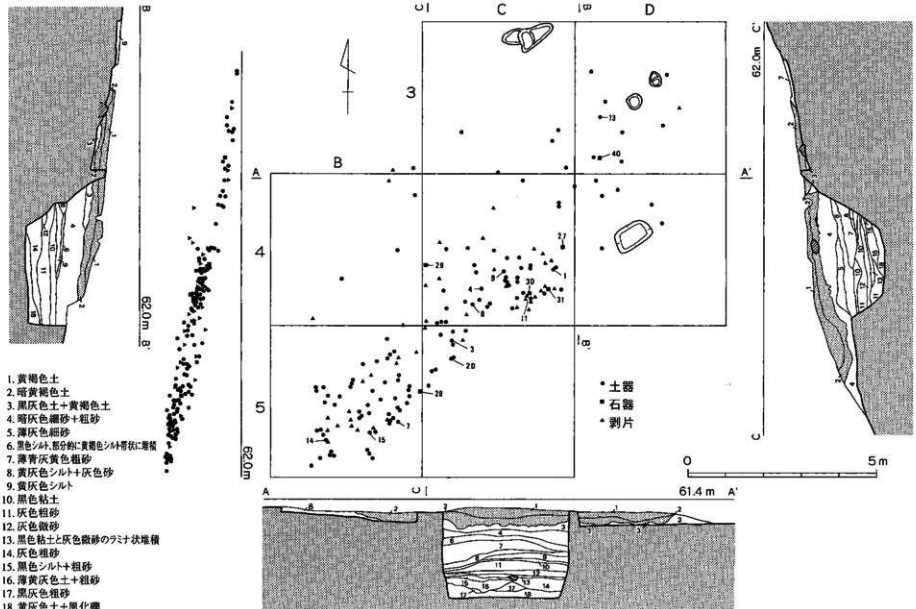
まずB～D列のグリッドについて説明を行う。第1層は風化礫を多量に含んだ黄褐色土でやや粘性を帯びる。第2層は第1層と同様風化礫を多く含み、暗黄褐色を呈しやや粘性を帯びる。この第2層下面は小さな凸凹を形成する。第3層は砂質で粘性が乏しく第4層と同質の黒灰色土に第2層が混入したもので、遺物はこの第3層にも若干含まれる。C-4グリッドのみ土層堆積状況の確認のために深掘りを行っている。第4層は暗灰色細砂・粗砂層で、上方のみわずかに遺物が出土した。5層以下は締まりのない砂層やシルト層、粘土層が薄く堆積しており河川の堆積と近似する。恐らく洪水による流出と堆積を繰り返した結果であろう。

遺物を主に包含する第1層・第2層の堆積状況であるが、C-3・D-3グリッド北側は土砂が流出しており地盤が露出する。南側は第2層が薄く堆積する。C-4・D-5グリッドは第1層・第2層が最も良好に堆積し、遺物も多く出土している。B-4・D-4・C-5グリッドは第1層・第2層がほとんど堆積しておらず、従って遺物の出土量も少ない。

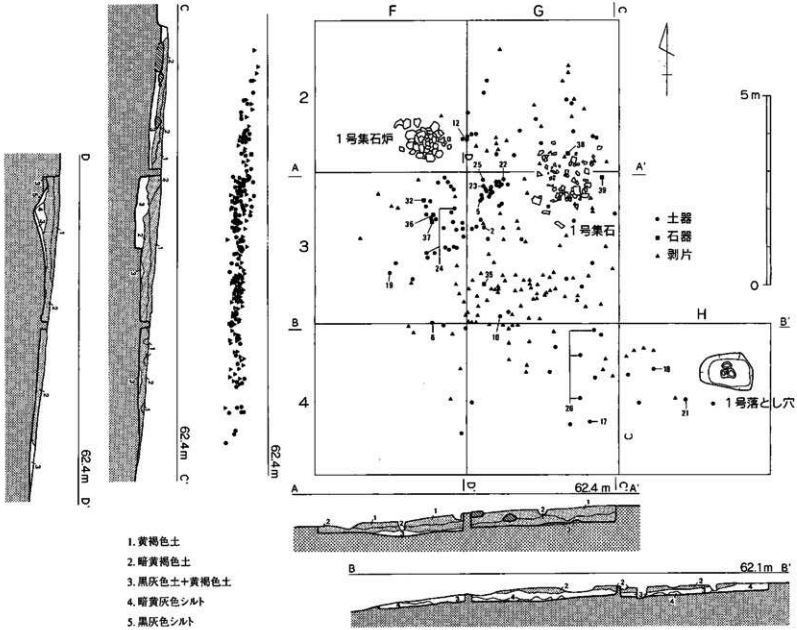
遺物の出土状況に関しては、特定器種が部分的に集中する傾向は見られない。また土器も磨滅が著しく小片のものが多い。従って二次堆積と想定される。

次にF～H列のグリッドについて説明を行う。土層の堆積状況は先述と同様である。旧地形は北東から南西に向かって緩やかに下降している。西端および南端は土砂が流出しており包含層の堆積はない。

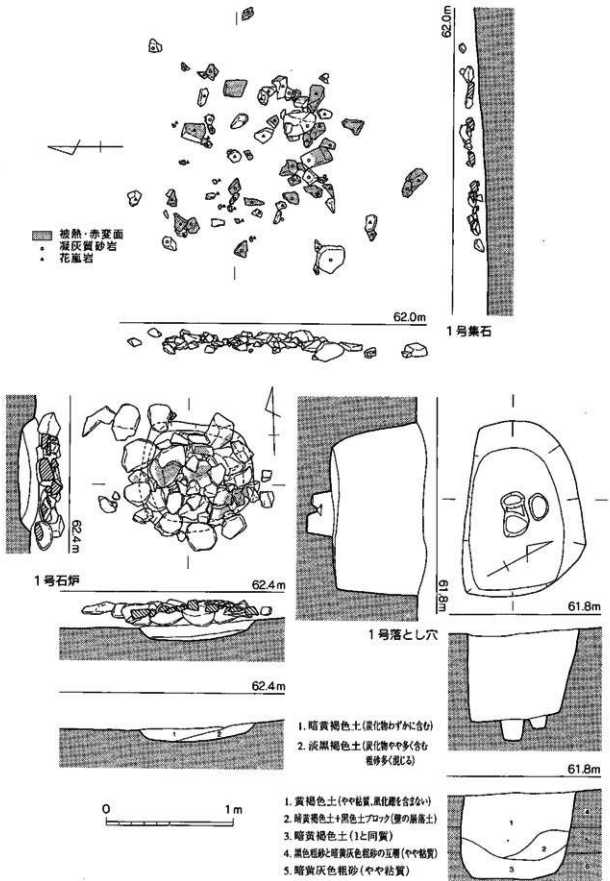
ここでは集石炉1基、集石遺構1基、落とし穴を1基検出した。遺物は集石炉・集石遺構の付近に分布するが、特にG-3グリッド南西側ではサヌカイト剥片が集中し、またF-3グリッド北東側、G-3グリッド北西側には無文土器が集中する。



第5図　縄文時代遺物分布図①（1/100）



第6図　縄文時代遺物分布図②（1/100）



第7図 集石・集石炉・落とし穴実測図 (1/30)

縄文時代の遺構

1号集石（図版3、第7図）

G-2グリッド南側からG-3グリッド北側にかけて検出した集石遺構である。おおよそ径2mの範囲にわたって、被熱・赤変した礫が広がる。礫は大半が花崗岩だが、凝灰質砂岩も若干混じる。掘り込みは全く認められない。

1号集石炉（図版3、第7図）

F-2グリッド南東側で検出した集石炉である。径約90cm、深さ約15cmの浅いすり鉢状の掘り込みの側壁に大きめの礫を花弁状に巡らせる。底部付近には礫を規則的に配置する行為は無いようである。掘り込みの内部は上層に炭化物をわずかに含んだ暗黄褐色土が、下層には炭化物をやや多く含み、粗砂が多く混じった淡黒褐色土が堆積する。その上面にはやや小さめの礫を無秩序に積み上げている。礫は一部が花崗岩である以外は大半が凝灰質砂岩である。礫は被熱し赤変するものもあるが、全てが赤変している訳ではない。遺物は全く出土しなかった。

1号落とし穴（図版3、第7図）

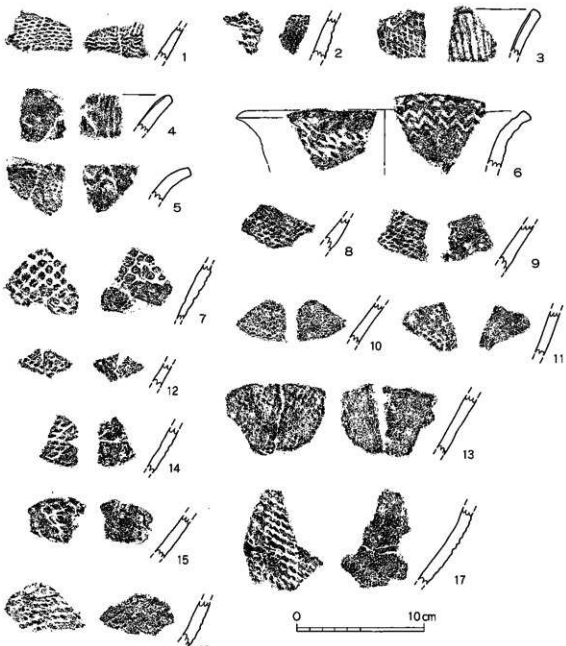
H-4グリッド東側で検出した不整長方形の落とし穴である。長軸140cm、短軸95cm、深さ75cmを測る。坑底中央に径15～20cm、深さ15～20cmのピットが2基掘り込まれる。その北側では径15cm、深さ10cmのピットを1基検出したが、これは南側の2基のピットと覆土が異なっていた。従って構造としては坑底中央に2穴を配置する落とし穴となるであろう。覆土は第1層が風化礫を含まずやや粘性を帯びた黄褐色土、第2層が暗黄褐色土と黒色土ブロックで側壁の崩落土、第3層が第1層と同質の暗黄褐色土である。遺物は全く出土しなかった。

縄文時代の遺物

縄文土器（図版7・8、第8・9図）

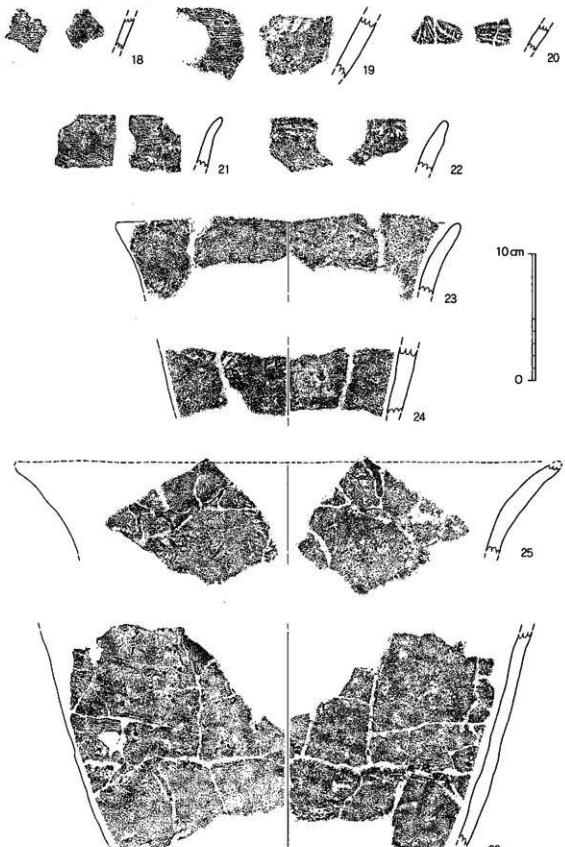
押型文土器（1～17）　1～7は押型文土器のうち、口縁部または口縁部に比較的近い部位のものである。1は内面の口縁部に近い部位に原体条痕、その下に山形文を施文し、外面は5mm程の横位楕円文を施文するが、口縁部に近い部位は無文となる。C-4グリッド出土。2は外面に山形文の原体端部を押圧する。G-3グリッド出土。3は内面に原体条痕、外面に7mm程の斜位の楕円文を施文する。C-4グリッド出土。4は内面に原体条痕、外面に11mm程の大きな楕円文を施文するもので、C-4グリッド出土。5は内面に山形文が施されるもので、G-3グリッドから出土。胎土に角閃石を含む。6は内面に山形文、外面に9mm程度の斜位の楕円文を施文するが、口縁部に近い部位は無文である。胎土に角閃石を含む。F-3グリッド出土。口径23.0cm。7は内外面ともに9mm程の大きめの楕円文を施文するもので、B-4グリッド出土。

8～13は外面に5～7mm程度の楕円文を施文し、内面は無文となるものである。8・9・11はC-4グリッド出土、10はG-3グリッド出土、12はG-2グリッド出土で胎土に角閃石を含む。13はD-3グリッド出土。14は外面に8mm程の楕円文を施文する。15～17は9mm程度のやや大きめの楕円文を施文するものである。15はB-4グリッド出土で胎土に角閃石を含む。16は廃土中からの出土。17はG-4グリッド出土で、底部に近い部位のために斜位の施文となる。

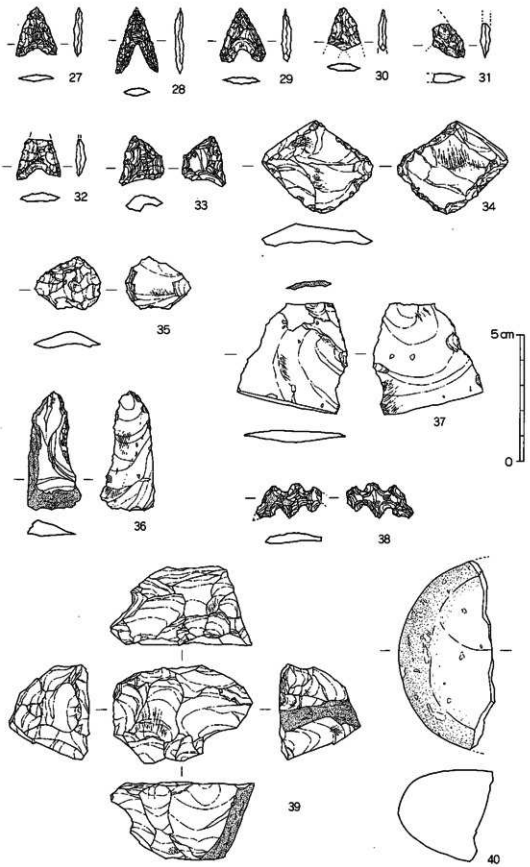


第8図　縄文土器実測図①（1/3）

撚糸文土器（18・19）　18・19はどちらも外面に横位の撚糸文を施文するもので、内面は無文である。18はH-4グリッドから出土し、胎土に砂粒をあまり含まない。19はF-3グリッド出土。
条痕文土器（20）　20は内外面ともに条痕調整を施すもので、C-4グリッド出土。
無文土器（21～26）　21～26は器壁が厚く、大型の無文土器である。21はH-4グリッド出土。22はG-3グリッド出土で胎土に角閃石を含む。23はG-3グリッド出土で口径27.0cmを測る。24はF-3グリッド出土で23と同一個体だが接合しない。25はG-3グリッド出土で、口縁端部を欠失するが、口径40cmを超える。胎土に角閃石を含む。26はG-4グリッド出土で胴部最大径38.2cmを測る。



第9図　縄文土器実測図②（1/3）



第10図　石器実測図（2/3）

石器（図版8、第10図）

石鏃（27～33）　27はC-4グリッド出土の黒曜石製石鏃。長さ2.0cm、幅1.6cm、厚さ0.3cm、重量0.7g。基部の抉り込みは浅い。28はB-5グリッド出土の黒曜石製石鏃で、先端を欠損する。現存で長さ2.5cm、幅1.65cm、厚さ0.3cm、重量0.7g。細かい剥離調整を加えており精巧な造りである。29はC-4グリッド出土のサヌカイト製石鏃。長さ2.15cm、幅1.8cm、厚さ0.35cm、重量0.9g。30はC-4グリッド出土のサヌカイト製石鏃で、両基部を欠損する。現存で長さ1.7cm、幅1.3cm、厚さ0.3cm、重量0.5g。31もやはりC-4グリッド出土のサヌカイト製石鏃で、基部片側のみ残存する。32はF-3グリッド出土のサヌカイト製石鏃で、先端を欠損する。現存で長さ1.65cm、幅1.7cm、厚さ0.4cm、重量0.8g。33は黒曜石製で、石鏃未製品か。長さ2.0cm、幅1.8cm、厚さ0.7cm、重量1.8g。2号溝覆土から出土。

スクレイパー（34・35）　34は不定形剥片の端部に刃部加工を施したサヌカイト製スクレイパーである。両側縁の一部にステップ状の剥離が認められることから楔形石器として使用した可能性もある。長さ3.7cm、幅4.3cm、厚さ0.9cm、重量11.4g。表面の風化が著しい。2号掘立柱建物跡P5から出土。35は寸詰まりの厚手の剥片に表面を中心に粗い刃部加工を施したサヌカイト製スクレイパーと考えたが石鏃未製品の可能性もある。長さ2.1cm、幅2.6cm、厚さ0.65cm、重量3.5g。G-3グリッド出土。

微細剥離のある剥片（36・37）　36は黒曜石の縦長剥片の右側縁にのみ微細剥離を有したもので、表面に大きく自然面を残す。長さ4.7cm、幅2.1cm、厚さ0.65cm、重量5.1g。F-3グリッド出土。37は幅広で薄手のサヌカイト剥片で、両側縁に微細剥離が認められる。打面に自然面を残す。長さ4.4cm、幅4.3cm、厚さ0.5cm、重量8.2g。F-3グリッド出土。

異形石器（38）　38はG-2グリッド出土の黒曜石製異形石器で、一部欠損する。側縁にのみ粗い剥離調整を施しており全体的にいびつな仕上がりである。表面に自然面、裏面に素材面を残す。現存で長さ2.6cm、幅1.4cm、厚さ0.4cm、重量1.1g。

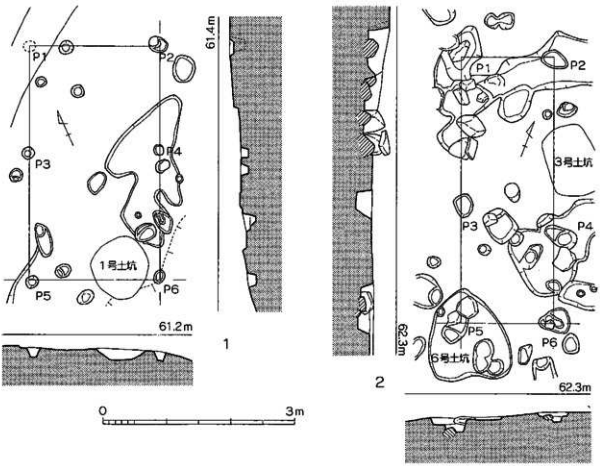
石核（39）　39はG-3グリッドから出土したサヌカイト石核である。分割礫を石核素材とし、その分割面を打面に、一部に打面調整を行いながら周縁に素材剥離を行っている。側縁の一部に自然面を残す。長さ5.6cm、幅3.8cm、厚さ3.15cm。

磨石（40）　40はD-3グリッド出土の凝灰岩製磨石で、大きく欠損している。表面、裏面ともに研磨面が認められる。側面は敲打痕らしき痕跡も認められるものの、明確ではない。現存で長さ7.6cm、幅3.8cm、厚さ3.6cm。

3　歴史時代の遺構と遺物

歴史時代の遺構は調査区のほぼ全面に亘って検出したが、特に調査区南西側の緩斜面に掘立柱建物跡・土坑・溝といった主な遺構が集中する。北東側で検出した遺構は不整形でまとまりがないものばかりであり、自然作用による地形の凹面に遺物を含んだ土が堆積したようである。

検出した遺構は、掘立柱建物跡2棟、土坑6基、溝3条である。



第11図 1・2号掘立柱建物跡実測図（1/60）

歴史時代の遺構

掘立柱建物跡

1号掘立柱建物跡（図版4、第11図）

調査区の南西隅に多くのピットが集中する場所があり、その中において掘立柱建物跡の可能性がある一案として提示するものである。梁行1間、桁行2間の建物で主軸方位をN-25°-Eにとる。P1は2号溝と重複しており確認できなかった。P2～P6は径20cm、深さ10～30cmと小さなものである。寸法は梁間205cm、桁間365cm、面積は7.48㎡を測る。遺物はP4から土師器片、P6から瓦片が出土したが細片で図示できない。

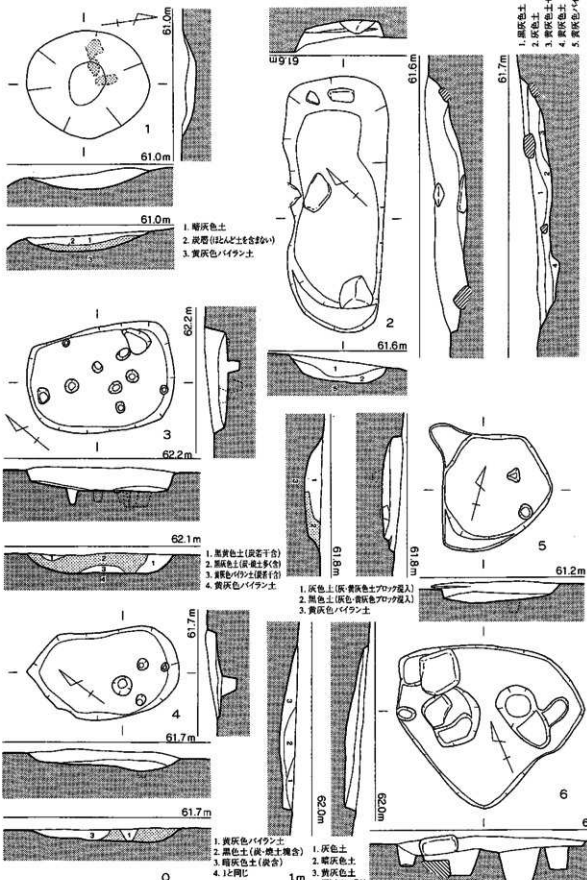
2号掘立柱建物跡（第11図）

調査区南西側で、平坦部の北東隅にピットが集中する場所があり、やはり掘立柱建物跡の可能性があるものとして提示するものである。梁行1間、桁行2間の梁間が狭い建物で主軸方位をN-21°-Wにとる。柱穴はいずれも不整形で、径25～60cm、深さ15～40cmと非常にばらつきがある。寸法は梁間145cm、桁間415cm、面積6.02㎡を測る。遺物はP5から第8図のサヌカイト製スクレイパーが出土した。

土坑

1号土坑（図版4、第12図）

調査区の南西隅に位置し、1号掘立柱建物跡と重複する土坑である。平面形は楕円形で、長



第12図　1～6号土坑実測図（1/30）

軸100cm、短軸85cmを測る。底面はすり鉢状に窪んでおり、深さは15cmを測る。覆土は上層に暗灰色土、下層に土をほとんど含まない純炭層が堆積し、底面には熱を受けて赤変した箇所が認められた。遺物は土師器・須恵器が3点出土したが、小片で図示できない。

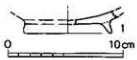
2号土坑（図版5、第12図）

調査区の南西側、1号土坑から6mほど北東に位置する土坑である。平面形は長方形に近く、長軸205cm、短軸84cmを測る。底面は西側に低く傾斜しており、深さは東側で20cm、西側で30cmを測る。覆土は上層に黒灰色土、下層に灰色土が堆積する。遺物は図示した椀の他に、土師器細片が20点程度出土している。

出土遺物（図版9、第13図）

土師器

椀（1）　1は椀の高台部片である。高台径7.6cm。胎土に石英・長石を若干含み、肌灰色を呈する。



第13図　土坑出土遺物実測図（1/3）

3号土坑（図版5、第12図）

調査区の南西側、平坦部の北東隅に位置し、2号掘立柱建物跡と接する。平面形は長方形に近く、長軸116cm、短軸85cmを測る。底面は平坦に近く、深さ18cmを測る。また底面では径8cm、深さ10cm前後の小ピットを幾つか検出している。覆土は全体的に炭が多く含まれるが、底面では顕著な赤変箇所は認められなかった。遺物は全く出土していない。

4号土坑（図版6、第12図）

調査区の南西側、3号土坑から6mほど南に位置する土坑である。平面形は長方形に近く、長軸120cm、短軸70cmを測る。底面は平坦に近く、深さ10cmを測る。底面の南寄りでは4個の小ピットを検出しており、径5～15cm、深さ5～10cmを測る。覆土には炭が多く含まれるが、底面では顕著な赤変箇所は認められなかった。遺物は土師器片が1点出土したのみであるが細片で図示できない。

5号土坑（図版6、第12図）

調査区の南西側、4号土坑から2mほど西側に位置する土坑である。平面形は不整形で、長軸93cm、短軸86cmを測る。北西隅、南側にそれぞれテラス状の段がある。底面は平坦に近く、深さ15cmを測る。底面では2個の小ピットを検出しており、径10cm、深さ10cmを測る。覆土は上層に灰色土、下層に黒色土が堆積し、いずれも炭を多く含むが、底面では顕著な赤変箇所は認められなかった。遺物は全く出土していない。

6号土坑（図版6、第12図）

調査区の南西側、5号土坑から4mほど北側に位置する土坑である。平面形は不整形で、長軸145cm、短軸130cmを測る。底面までの深さは10cmを測る。底面ではピットや礫を検出している。このうち西側のピットについては2号掘立柱建物跡の柱穴を想定しているが、当土坑との先後関係は判断できなかった。遺物は全く出土していない。

溝

1号溝（第4図）

調査区の北東隅で検出した溝である。調査区においては長さ5.4m、幅4.5mを測り、溝の中央に向かってすり鉢状に落ち込んでいる。深さは最深部で40cmを測る。形状から人為的な溝とは考え難く、自然流路を想定した方が妥当であろう。覆土は黒色シルトの単一層である。溝の南壁から1mほど内側で、溝壁に沿って3本の小杭を検出した。3本ではあるが、一応直線的に並んでおり、杭列と呼べるものである。いずれも径5cm程度の細木の先端に加工を加えただけのものである。これらは溝壁まで達しておらず、埋没途中で設置されたものであろう。覆土中からは図示したものの他に土師器・須恵器・瓦小片が30点ほど出土している。

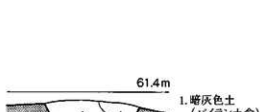
出土遺物（図版9、第15図）

陶器

壺（1）　1は壺の底部片である。胎土に石英・長石粒を若干含み、釉色は暗緑色を呈す。底径11.0cmを測る。

2号溝（図版4、第14図）

調査区の南西側に位置する溝で、長さ21mに亘って検出した。若干蛇行するが、ほぼ地形に沿っている。北東側および南西端は削平されており途切れている。溝の幅は50cm、断面は逆台形に掘削され、深さ15cmを測る。覆土は上層に暗灰色土、下層に黒灰色土が堆積する。遺物は図示した須恵器、瓦の他に第10図33の黒曜石石鏃未製品が出土している。



第14図　2号溝実測図（1/20）

出土遺物（図版9、第15図）

須恵器

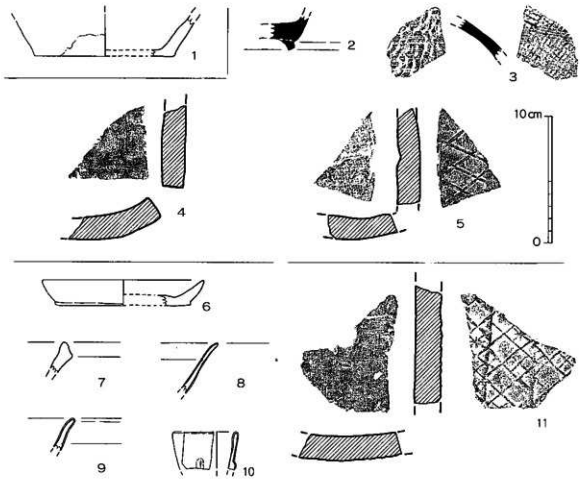
壺（2）　2は器形が不明だが壺として報告する。底端部にシャープな高台を貼り付けており、高台部は内側で接地する。胎土に石英・長石粒を若干含み、灰色を呈す。

甕（3）　3は甕の肩部片である。内面は同心円当て具痕、外面は格子タタキを行う。胎土に石英・長石の細粒をやや多く含み、外面褐色、内面灰色を呈す。

瓦（4・5）　4は須恵質の平瓦である。外面はナデ消し、内面は側縁付近がナデ、他は布目圧痕である。切り離しは身の半分の厚さまでヘラ切りをした後に折断を行っている。胎土に砂粒をやや多く含み、表面は黒色を呈す。5は外面斜格子タタキ、内面布目圧痕が残る。胎土に砂粒を若干含み、灰色を呈す。

3号溝（第4図）

調査区の南西側に位置する溝で、長さ20mに亘って検出した。中央からやや北寄りの箇所が削平され途切れている。若干蛇行するがほぼ地形に沿っている。幅は西側で1m、東側で1.5mを測る。深さは西側で15cm、東側で10cmを測る。覆土は黒灰色土の単一層である。



第15図　溝出土遺物実測図（1/3）

出土遺物（図版9、第15図）

土師器

皿（6）　6は底部糸切り調整の皿である。口径12.6cm、器高2.0cm、底径10.6cm。胎土に石英・長石・雲母粒を若干含み、黄灰色を呈す。

須恵器

鉢（7）　7は須恵質の鉢である。口縁部は断面三角形に仕上げる。胎土に砂粒を若干含み、灰色を呈す。

白磁

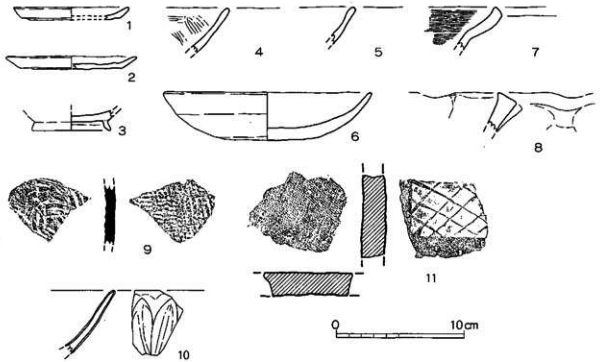
椀（8）　8は白磁椀の口縁部で、口縁部内面に1条の沈線を巡らす。

青磁

椀（9）　9は青磁椀の口縁部片である。外面口縁部下に1条の沈線を巡らせている。釉色は青緑色を呈す。

香炉（10）　10は香炉である。口径5.2cm、釉色はくすんだ黄緑色を呈す。

瓦（11）　11は外面は斜格子タタキを基本とし、その斜格子の中に部分的に米状文や斜格子と平行する十字文を配置している。内面は布目圧痕が残る。胎土に砂粒を若干含み灰色を呈す。



第16図　ピット出土遺物実測図（1/3）

ピット出土遺物（図版9、第16図）

土師器

小皿（1・2）　1はP57出土の小皿である。口径9.0cm、器高1.0cm、底径6.2cmを測り、底部は風化が著しく調整不明。化粧土を施している。胎土に石英・長石微粒を若干含み、肌灰色を呈す。2はP19出土の小皿で口径10.2cm、器高0.9cm、底径7.8cmで底部は糸切りである。胎土に石英・長石粒をわずかに含み、肌灰色を呈す。

椀（3～5）　3はP75出土の椀で、高台径6.0cm。胎土に石英・長石粒等を含み、肌灰色を呈す。4はP50 出土の口縁部片で、内面にはヘラミガキが残るが外面は風化が進んでおり調整不明。胎土に石英・長石を若干含み、肌色を呈す。5はP72出土の椀口縁部片で、器表に化粧土を施す。胎土は砂粒をほとんど含まず精良である。

椀（6）　6はP89から出土した丸底坏で、口径16.4cm、器高3.75cm。底部はヘラ切りである。胎土に石英・長石をやや多く含み、肌灰色を呈す。

鉢（7・8）　7はP17出土の土師質鉢で、口縁部が緩く屈曲して内湾し、端部は上方に尖り気味に仕上げる。8はP22出土の土師質片口鉢である。胎土に石英・長石をやや多く含み、褐色を呈す。

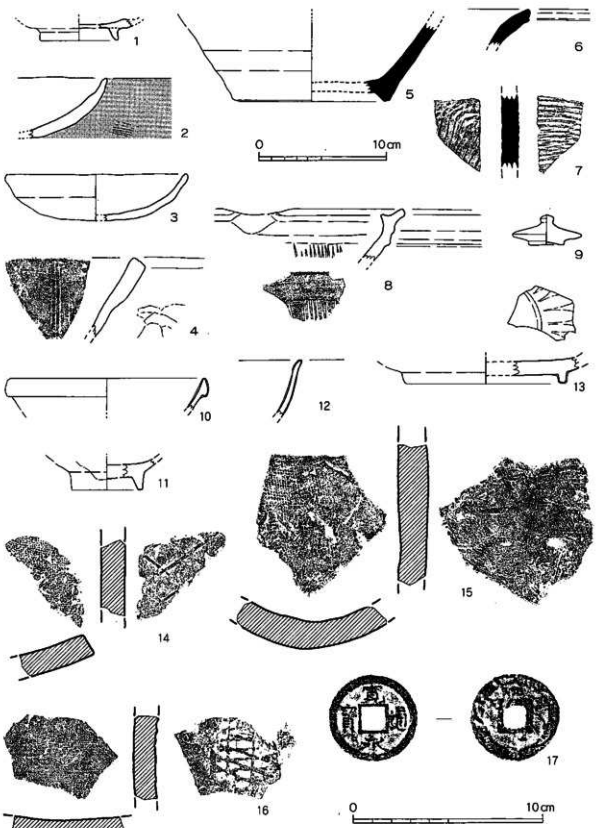
須恵器

甕（9）　9はP45出土の甕胴部片である。内面同心円当て具痕、外面格子タタキ仕上げを行う。胎土に石英・長石細粒をやや多く含み、灰色を呈す。

青磁

椀（10）　10はP74から出土した青磁椀の口縁部片で、外面に鎬蓮弁を配す。釉色はくすんだ薄緑色を呈し、表面の風化が著しい。

瓦（11）　11はP76から出土したもので、外面斜格子タタキ、内面布目圧痕が残る。胎土に砂粒を若干含み、暗灰色を呈す。



第17図　包含層その他出土遺物実測図（1～16：1/3、17：1/1）

包含層その他出土遺物（図版9、第17図）

土師器

椀（1）　1は黒褐色土層出土の椀で、高台径6.2cm。胎土に石英・長石を若干含み、肌灰色を呈す。

坏（2・3）　2は調査区南側遺構面出土の土師器坏で口縁端部がやや外反する。内面ヨコナデ、外面ハケ目後ナデ調整を行い、外面のみ丹塗りを行う。胎土に石英・長石・角閃石微粒をやや多く含み、肌茶色を呈する。3は第3試掘トレンチから出土した丸底坏で、口径14.4cm。胎土に石英・長石の粗粒を若干含み、黄肌色を呈する。

鉢（4）　4は廃土中から出土した土師質擂鉢の口縁部片である。口縁部は肥厚し、端部を四角く仕上げる。内面は横ハケ後に6本の擂目を入れ、外面口縁部下には指圧痕が明瞭に残る。胎土に石英・長石等細粒をやや多く含み、肌色を呈す。やや軟質である。

須恵器

壷（5）　5は調査区南端の暗褐色土から出土したもので、壷であろうか。高台は断面台形を呈し、体部は直線的に立ち上がる。高台径12.4cm、胎土に石英・長石を若干含み、灰色を呈す。

甕（6・7）　6は調査区南端の暗灰褐色土から出土した甕の口縁部片で下端をつまみ出す。胎土に石英・長石粗粒をやや多く含み、内面灰色、外面暗褐色を呈し、外面に自然釉が付着する。7は調査区南端暗灰褐色土から出土した甕片で、小片のため傾き不明である。内面は同心円当て具痕の後に平行当て具、外面は平行タタキを行う。胎土に精良な粘土を使用し、灰色を呈す。

陶器

鉢（8）　8は備前系擂鉢の片口部片で、口縁部内面に1条、外面に2条の三角突帯を巡らす。胎土に石英・長石の細粒を若干含み、紫茶色を呈す。

蓋（9）　9は盛土層から出土した蓋で、内面は糸切り調整を行う。上面のみ黒褐色釉を施釉する。胎土は微砂を若干含み、茶色を呈す。

白磁

椀（10・11）　10は調査区南側遺構面から出土した口縁部が玉縁となる白磁椀である。11は試掘第4トレンチから出土した白磁椀で、高台径5.4cmを測る。

青磁

椀（12）　12は試掘第3トレンチ出土の青磁椀の口縁部片である。釉色はくすんだ緑色を呈す。

盤（13）　13は廃土中から出土した青磁盤である。内面見込みに一条の沈線を巡らせ、さらに蓮弁を配する。内面の沈線より内側および外面高台部より内側は露胎となり、この露胎部分は赤く変色する。高台径12.8cm。

瓦（14～16）　14は調査区北側遺構面から出土したもので、外面斜格子タタキ、内面布目圧痕が残る。側縁はナデ仕上げを行う。胎土に砂粒を若干含み、灰色を呈す。15は調査区東側遺構面出土の平瓦片で、凸面は大きな斜格子タタキ、内面は布目圧痕が残る。胎土に砂粒を若干含み明灰色を呈す。全体的に風化が著しい。16は盛土層から出土したもので、外面は交点上に縦軸線を入れた斜格子目タタキ、内面は布目圧痕。胎土に砂粒を若干含み、灰色を呈す。

古銭（17）　17は調査区北東側遺構面出土の寛永通寶である。風化が著しい。径2.3cm、孔一辺0.55cm、重量2.1g。

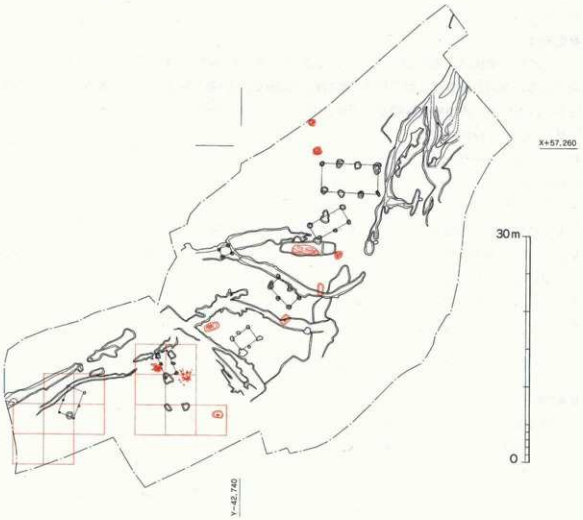
Ⅳ　おわりに

浦ノ田遺跡第2次調査では、遺跡が展開する平坦面を中心に約1,120㎡の発掘調査を実施した。その結果、縄文時代早期と歴史時代の遺構、遺物の発見することができた。調査区は浦ノ田遺跡B遺跡とした第1次調査区と接しており、当然のことながら第1次調査でも同様の成果が得られている。以下では第1次調査の成果も含めて遺跡の様相を概観したい。

縄文時代

第1次調査では縄文時代早期の遺構は集石炉3基と落とし穴1基が検出されている。第2次調査でも黄褐色土に縄文時代早期の遺物が包含されることを確認し、押型文土器を中心とした土器、石器が出土した。また集石、集石炉、落とし穴各1基を検出した。遺物の出土量や遺跡の立地環境、遺構の性格を考えると、縄文時代早期の一時的な活動拠点としてこの土地を利用していたようである。

第2次調査で出土した縄文時代早期の遺物は土器が241点、石器・剥片類は149点を数える。量



第18図　浦ノ田遺跡主要遺構配置図（1/500）

的には少ないがおおよその時期的傾向が把握できる。土器は楕円押型文を中心に比較的多量の無文土器、若干の撚糸文土器、条痕文土器が伴う。まず楕円文に関しては粒が小さく横位に施文するものと8mmを超える大きめの粒で斜位に施文するものとに大別される。口縁部では粒の小さな第8図1は内面に原体条痕と山形文を施文する。粒の大きなものは第8図3・4の様に内面に原体条痕を施文するもの、5・6の様に山形文を施文するもの、7の様に外面と同一原体の楕円文を施文するものがある。他に5・6に関しては口縁部が大きく開く特徴が指摘できる。楕円文の大きさや方向に注目すれば二つの時期に区分が可能であり、粒の小さな楕円文を施文するものは早水台式から下菅生B式併行期に、大きめのものは田村式併行期に位置づけられるであろう。

石器は微細剥離を有する剥片、サヌカイト石核も含め、わずか14点出土したにすぎない。石器組成については述べようもないが、石鏃の出土数が多く、次いでスクレイパー類、1点ではあるが磨石が伴うといった早期の一般的セット状況にあることは指摘できる。またG-3グリッド南側からG-4グリッド北側にかけてサヌカイト剥片が集中して出土し、さらに第10図39の石核が出土しておりこの場で石器製作が行われたことが窺える。異形石器としたものについては他の例を知らず、今後の類例を待ちたい。

歴史時代

歴史時代の遺構は、第1次調査では竪穴遺構2基、掘立柱建物跡5棟、土坑1基、溝9条が検出されている。今回の調査では掘立柱建物跡2棟、土坑6基、溝3条を検出した。両調査とも出土遺物は多くはないが、古墳時代後期から近世に至るまでのものが出土している。

第1次調査では検出されず、今回新たに検出した遺構として1・3・4・5号土坑のような焼土坑が挙げられる。同例のものが太宰府天満宮第2次調査でも検出されている。これに対しては幾つかの見解があるが、やはり太宰府天満宮に近いということも考えて、火葬施設を想定しておきたい。

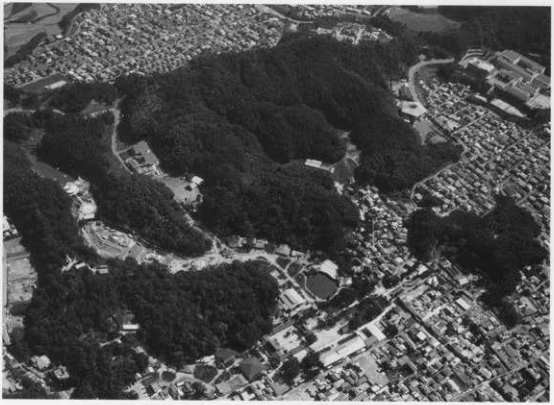
集落景観は前回の調査時と大きく変わるものではなく、狭い平坦地に掘立柱建物を建て、地形に沿って区画溝を配置している。建物の配置には計画性が見られず、また柱穴の規模も小さく配置にも明確な規則性が見られない。こうした様相は古代～中世の小規模集落に一般的なものである。従って太宰府天満宮（安楽寺）に関連する施設と考えるよりも、山裾の平坦面を居住空間に選定し、小規模な谷水田経営を生業の中心とした零細農民層の住居を想定した方がよいだろう。

参考文献

『太宰府天満宮Ⅱ』　太宰府市の文化財第15集　太宰府市教育委員会　1990

『浦ノ田A・B遺跡』　福岡県文化財調査報告書第126集　福岡県教育委員会　1996

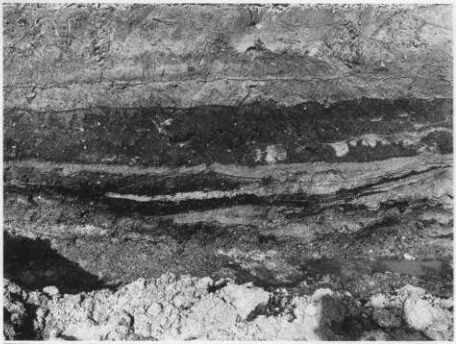
図　版



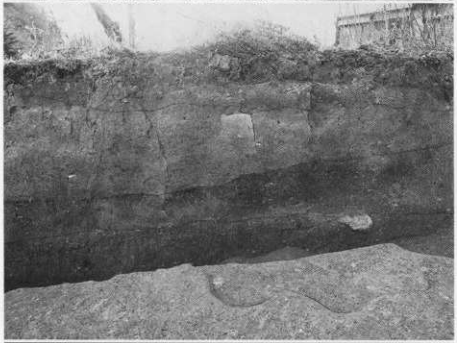
1. 浦ノ田遺跡周辺（航空写真 北から）

2. 浦ノ田遺跡第2次調査区全景（気球写真 南から）

図版 2



1. 調査区北東壁土層（西から）

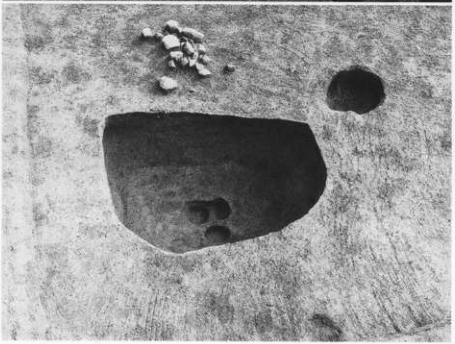


2. 調査区南西壁土層（東から）

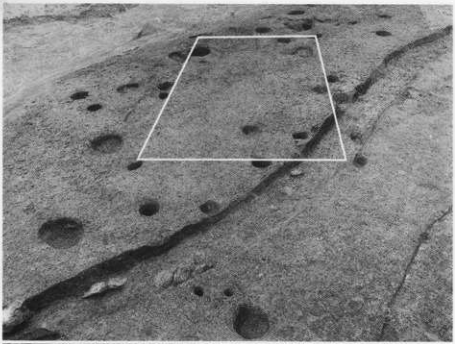
3. グリッド調査風景（北から）

1. 1号集石（南から）

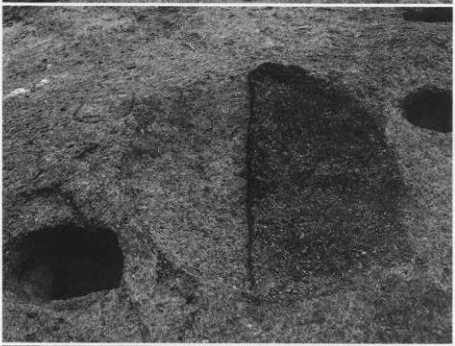
2. 1号集石炉（南から）



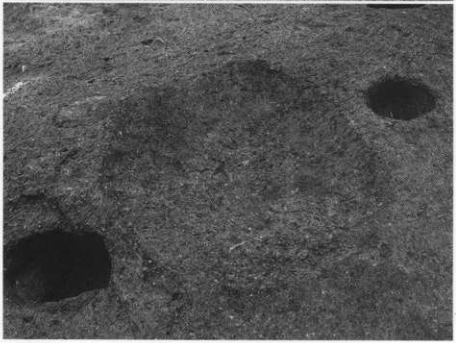
3. 1号落とし穴（北から）



1. 1号掘立柱建物跡・2号溝（北から）

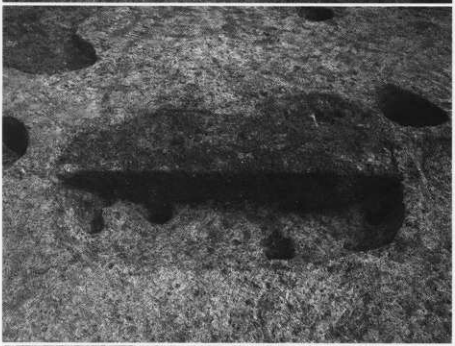


2. 1号土坑焼土層半截状態（北から）

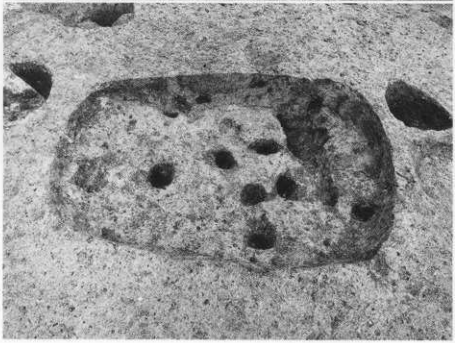


3. 1号土坑完掘状態（北から）

1. 2号土坑（北から）



2. 3号土坑半截状態（西から）

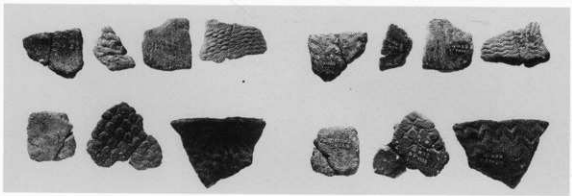


3. 3号土坑完掘状態（西から）

1. 4号土坑（西から）

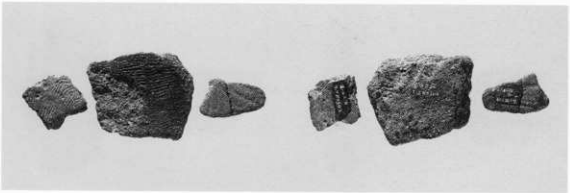
2. 5号土坑（西から）

3. 6号土坑（西から）

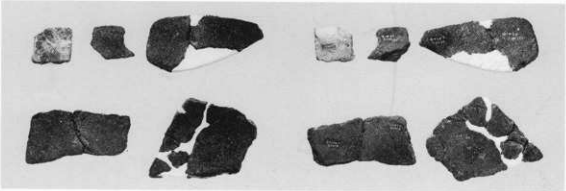


1. 縄文土器①

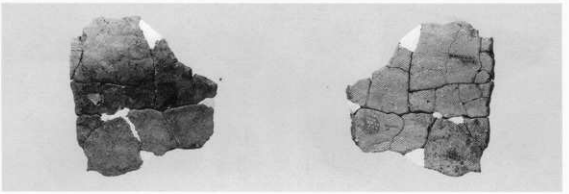
2. 縄文土器②



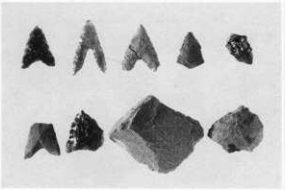
3. 縄文土器③



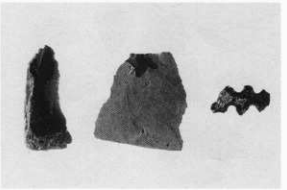
4. 縄文土器④



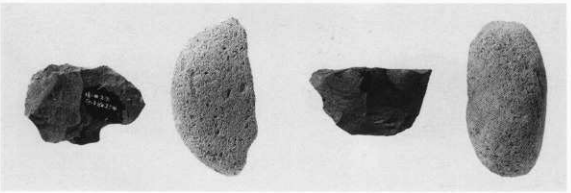
1. 縄文土器⑤



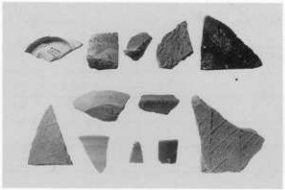
2. 石器①



3. 石器②

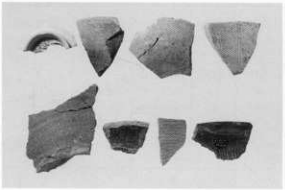


4. 石器③

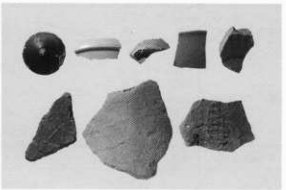


1. 土坑・溝出土遺物

2. ピット出土遺物



3. 包含層出土遺物①



4. 包含層出土遺物②

5. 古銭

報告書抄録

ふりがな	うらのたいせき
書名	浦ノ田遺跡Ⅱ
副書名	九州国立博物館建設予定地内の埋蔵文化財発掘調査
巻次	2
シリーズ名	福岡県文化財調査報告書
シリーズ番号	第155集
編著者名	吉田　東明
編集機関	福岡県教育委員会
所在地	〒812-8575　福岡県福岡市博多区東公園7番7号　☎092(651)1111
発行年月日	西暦2000年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
うらのだ 浦ノ田遺跡Ⅱ	ふくおかけんだざいふし 福岡県太宰府市 おおあざいしざかあざうらのた 大字石坂字浦ノ田	40221	210159	33° 0′ 54″	130° 32′ 39″	1999.1.12 ～ 1999.3.19	1,120㎡	九州国立博物館建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
浦ノ田遺跡Ⅱ	集落	縄文時代 平安時代 鎌倉時代	集石・集石炉・落とし穴 掘立柱建物跡・土坑・溝	押型文土器・石器 須恵器・土師器・陶磁器	

福岡県行政資料	
分類番号 JH	所属コード 2133051
登録年度 11	登録番号 17

福岡県文化財調査報告書 第155集

浦ノ田遺跡Ⅱ

平成12年3月31日

発行　福岡県教育委員会
福岡市博多区東公園7番7号

印刷　大同印刷㈱
〒840-0815　佐賀市天神一丁目1番32号
TEL 0952(24)8450㈹